

## 【写真芦川】生活点点滴滴

上 接 :       【 写 真 芦 川 】 淳 朴 乡 风  
( [http://www.keguan.jp/kgjp\\_shehui/kgjp\\_sh\\_quwei/pt20190611060002.html](http://www.keguan.jp/kgjp_shehui/kgjp_sh_quwei/pt20190611060002.html) )

芦川写真集作品の紹介も今回で 5 回目を迎えることとなりました。毎回芦川を色々な角度から見つめ作品説明をしまいいりました。

さて、住民にとりましてはこれまでに色々な事象との戦いがありました、その中で今回は「別れの戦い」についてお伝えしたいと思います。多くの家庭でおじいちゃんとおばあちゃんの老夫婦が生活しています。連れ合いが先立つ場合は長らく住み親しんだ環境と、これまで築いた人間関係の中でお別れすることとなりますが、時間が経過して残された一方の連れ合いの独居生活が困難となった場合は、村外に住む子供の元に引き取られることがよくあります。

夫婦で過ごした愛着のある家、生活を共に楽しんだ隣人や友達、目に沁みついている故郷の景観とお別れをしなくてはならないのです。このことは本人にとって極めて辛いことです。さらに新しい住居に移った後も環境に戸惑いながら友人、知人のいない場所で生き続ける戦いが始まります。高齢の身にとっては努力に限界のある厳しい条件なのです。

このことは子供夫婦が同居をしていないがために迎える親の苦悩で、空き家となった裏側にはこのような事情が垣間見られるわけです。今回これまで作成した芦川作品をウェブ掲載するに当たり、掲載人物作品の承認を取るため全員に問い合わせをしましたが、その折に本人が抱える健康、環境、人間関係など様々な辛さを改めて知る機会に遭遇しました。

一旦居住地を離れてしまうとその人の情報は途絶えてしまいがちですが、撮影現場で空き家に出合ったとき、その背景には別れと戦う人がいることを認識せざるを得ません。写真には一枚いちまいに歴史が込められています。

それでは、いよいよ本シリーズも終盤に入ってきました今回の作品をご覧ください。なお、次回の6回をもちまして第2弾芦川写真集作品の紹介は終了することとなりますが、続けて別シリーズをお届けする予定でありますのでどうぞご期待ください。

写真家 高橋ぎいち



- 1 以前は車庫として使われていましたが、今は主人が亡くなり車はありません。そこには犬が繋がれていました。犬小屋としては大変広く、井井（せいせい）としていますが、犬はどこか寂しそうに見えました。



2 2005年4月に小学校へ入学した1年生は男の子1人と女の子2人の3人だけでしたが、特別に珍しいことではありません。毎年この様なものなのです。この子たちは今年で20歳になりました。成人を機にこれから故郷芦川とどう係わっていこうと考えているのでしょうか、気になるところです。



3 以前は雑貨店を営んでいましたが、ご覧のとおり現在は店仕舞いをしています。間口一間「出入り口の幅1.8m」のこぢんまりとした店ですが、一時は随分繁盛をしたとの事です。人口が減り商売も立ち行かなくなり見切りをつけました。表に立っているポストは現在も使われていますがその

頃の名残です。



- 4 集落のちょっとした空き地に設けられたゲートボール場、その片隅に造られた湯沸し場です。勿論ゲートボールは好きですが、健康管理や会話を楽しむためにも多くのお年寄りが参加しているスポーツです。山林集落ですから燃料に事欠く心配はありません。そしてここで生まれる会話にも事欠く様子はありません。



- 5 住居の庭から裏の畑に行くための敷地内通路です。今は晩秋、畑は夏の野菜の取り入れが終り、暫くのあいだ休耕しています。この後に冬越え野菜の作付けが始まります。先代もそして先々代もやってきた農業の営が引き継がれているのです。これまでに誰が、どんな気持ちで通ったか、この

家の歴史を通路は知っています。



6 ひとしきりゲートボールを楽しみ休憩に入ったおばあちゃん。お茶を飲みお菓子を食べて、プレーの反省と少しばかり自慢話もできます。集落にはゲートボールの公認審判の資格を持つおじいちゃんがいる、ずっと指導を続けてきた成果が出ているのです。芦川4集落の中でここ上芦川（かみあしがわ）はとても強いチームです。



7 玄関わきに整理された作業道具です。剪定鋏や鎌、柱には温度計も掛か



っています。しかし刃物は錆びていて暫く使っていないように思われます。声掛けをしましたが返事がありませんので、様子を気にしながらこのコマを収めました。この主人も高齢です。体調不良で床に伏していないことを祈ります。



8 山の斜面にひっそりと佇む椿は、少しばかりの花を付け慎ましやかに振る舞っています。日本では既に万葉の昔（西暦 700 年代）から日本人の生活に深く係わりのある植物です。背後の石仏との取り合わせは実に均衡のとれた景色です。



9 敷地と畑の境に土の中から出てきた石が積み上げられています。少しず

つ敷地を拡げていくたびに石との向き合いが発生するのです。大変な労力を費やすこととなりますが、住民は石を上手に取り込んで生活環境を構築していくのです。



10 車 1 台がどうにか通ることのできる狭い旧道から、更に細い下りの通路へと枝分かれしています。少し進んで突き当りを左に折れると、やっと住居にたどり着くことができます。そこに現代を生きる芦川人の昔から続く生活の場があるのです。

文 撮影師 [高橋義一](#) (高橋ぎいち)

翻译编辑 JST 客观日本编辑部